

<論文>

## 20世紀における英語の語法変化について —David Crystal 編 Fowler 初版をもとに—

浦田 和幸

### 1. はじめに

小論では、英語の語法書の鑑ともいえる Henry Watson Fowler (1858-1933) 著の *A Dictionary of Modern English Usage* (1926) を出発点として、20世紀の主にイギリスにおける英語の語法変化について考えてみたい。英語の世界において Fowler の名は人口に膾炙し、Fowler と言えば *A Dictionary of Modern English Usage* (以下、MEU) を指すのが常識のようになっている。「Fowler らしさ」を表す言葉として、「Fowlerian」、「Fowlerish」、「Fowleresque」などの形容詞もあるくらいである。<sup>1)</sup>

人気を誇る MEU はファウラー没後も改訂版が出され、現在に至っている。改訂の経緯を振り返っておく。

[MEU1] *A Dictionary of Modern English Usage* (1926)

[MEU2] *A Dictionary of Modern English Usage, Second Edition* (1965) (Rev. by Sir Ernest Gowers)

[MEU3] *The New Fowler's Modern English Usage, Third Edition* (1996), Revised Third Edition (1998) (Ed. by R. W. Burchfield)

初版出版から約40年後の1965年には、Ernest Gowers (1880-1966) による第2版が出版された。第2版は、項目の配置などの点で初版と違いがあるものの実質的な意味では大差なく、原著者ファウラーの特徴を最大限に生かした小改訂であった。ただし、目立たないながらも、約40年間の英語の変化を反映して記述の変更がある点は見逃せない。その後、MEU 初版から数えて70年後、第2版から数えて約30年後に、Robert William Burchfield (1923-2004) による第3版が出版された。改訂者の Burchfield は文献学者であり、かつ、*Oxford English Dictionary* の新補遺の編集主幹を務めたという経歴からも察せられるように、第3版では豊富なデータと史的パースペクティブが大きな特徴をなしている。その結果、MEU は客観性が高まり、記述的色彩の濃い語法書に様変わりした。英語史や語法研究などの観点からは非常に有益な改訂であったが、「規範」か「記述」かに関する世間一般の受け入れ方から予想されるように、「ファウラー」の名に権威を感じ郷愁を覚えてきた人々にとっては、有難くない改訂であった。

MEU 第3版は、ファウラーの名を冠した別個の語法書と見たほうがよい。共時的かつ通時的に、また、規範的かつ記述的に語法書を見る場合、初版と第3版は相補的である。2002年には、Oxford Language Classics という新シリーズのなかに MEU 初版が収められ、書店には初版と第3版が相並んだ。

さらに、2009年には、MEU 初版が、イギリスの英語学者の David Crystal によって、序文と注釈付きで新たに復刻された。序文 (pp. vii-xxiv) では言語学的な立場から客観的に MEU 初版の評価を行い、末尾には、補遺として “Fowler’s Pronunciation Preference” (p. 743) を加え、続いて “Notes on the Entries” (pp. 745-784) と題して、MEU 初版のうち 283 項目に関して今日の観点から多岐にわたる注釈を付けている。<sup>2)</sup> 小論では、クリスタルの注釈から 20 世紀の英語の変化を示す興味深い項目をいくつか選び、MEU 初版が執筆された 20 世紀初期以降、今日に至るまでの語法変化の跡を辿ることにする。第2節では MEU 初版を基点にして 20 世紀における変化の例を概観し、第3節ではコーパスを用いて現代の用法を検討する。

## 2. 20 世紀における変化—MEU 初版を基点にして

以下、語義、語法、接続法について順に検討する。MEU の初版 (1926) を基点とし、必要に応じて、第2版 (1965) と第3版 (1996) を参照する。歴史的概観は *Oxford English Dictionary* (以下、OED) に拠り、また、語法の変遷を跡付けるために、適宜、*Concise Oxford Dictionary* (以下、COD) の歴代の版の記述を確認する。<sup>3)</sup>

### 2.1. 語義

ここでは、語法上しばしば問題となる ‘unique’, ‘conservative’, ‘meticulous’, ‘mentality’, ‘inflammable’ という 5 語を例に取り上げ、語義の点から検討する。

#### 2.1.1. unique

‘unique’ は 17 世紀にフランス語から借用された語で、語源的にはラテン語の *unicus* (唯一の)、さらに *unus* (一つの) に遡る。したがって、‘unique’ は「唯一の」が正統な意味であるとされたが、実際には意味が弱まり、「珍しい、普通でない」という意味でも用いられるようになった。語法上、しばしば問題とされてきた。‘unique’ は「唯一の」という絶対的な意味で用いられるべきであるゆえ、*very* で修飾したり、*more* を付けて比較級にするのは誤りである、というのが規範的な立場である。

ファウラーも MEU (s.v. *unique*) のなかでこの問題を取り上げ、副詞との共起関係に言及している。ファウラーが ‘unique’ と共起可とする副詞は *quite, almost, nearly, really, surely,*

perhaps, absolutely, in some respects など、容認できない副詞は more, most, very, somewhat, rather, comparatively などである。しかし、実際には後者の無意味な例がしばしば見られる (“Such nonsense, however, is often written.”) と述べて、実例を挙げている。誤用と考えるかどうかはともかく、ファウラー執筆当時の 20 世紀初期においても、‘unique’ を「珍しい、普通でない」という弱化した意味で用いるのが普通であったことが分かる。

クリスタルは、‘unique’ という語の意味用法上の変化に関して、“What seems to have happened, semantically, is that *unique* is now seen as part of a scale, at the top of which is the absolute (‘the only one’) sense.” (p. 780) と述べている。つまり、‘unique’ は語源的には非段階的形容詞 (nongradable adjective) であったとしても、現用法では段階的形容詞 (gradable adjective) であり、その頂点に絶対的な意味 (「唯一の」) が位置するということである。そして、程度がどの段階にあるかを示すために副詞が選ばれる。 *absolutely unique* といえ、かつての本来の ‘unique’ の意味 (「唯一の」) を表し、 *rather unique* といえ、尺度の中でより低い段階にあることを表す。

依然として ‘unique’ には 2 つの意味 (絶対的意味「唯一の」 vs 相対的意味「珍しい、普通でない」) があるため、どちらを意図しているのか紛らわしいことがあるが、その解決策としてクリスタルは副詞の効用を説いている。‘unique’ という語の現用法を巧みにとらえていると思われるので下に引用しておく。(p. 780)

The adverbs seem to be increasingly relied upon to resolve potential ambiguity. If I say, these days (e.g. referring to a stamp), *This is a unique example*, it is unclear whether I am using *unique* in the absolute or relative sense. Adverbs would clarify: *This is an absolutely unique example* vs *This is a somewhat unique example*.

*somewhat unique* は、語源的意味に重きを置く規範的な立場からすれば誤用のレッテルを貼られるところであるが、表現上の必要や明確化という点では特に問題はないであろう。慣用が語源や規範に勝り、いずれは ‘unique’ のこのような用法は非難されることもなくなるであろう。

### 2.1.2. conservative

OED によると、‘conservative’ という語は中英語期に「保存力のある、保存性の」という意味でフランス語から借用されたが、1830 年にイギリスのトーリー党 (the Tory) が ‘the Conservative party’ と呼ばれたところから「保守党の」という意味が生じ、1845 年には「(進歩的に対して) 保守的な ; 保守主義の」という意味での用例が文献に登場する。その延長

線上で、1900年からは「慎重な、中庸の；(評価などが)控え目な」という意味でも用いられるようになった。OEDによると、この語義は元来アメリカ語法である。

ファウラーがMEU執筆当時の20世紀初期、「控え目な」という意味での‘conservative’がイギリスで急速に広まりつつあったようである。彼は、‘conservative estimates/figure’ (控え目な見積もり/数字)などの用法を指して、“perhaps the most ridiculous of SLIPSHOD EXTENSIONS” (だらしのない意味拡張のなかで、おそらく最も滑稽なもの)と糾弾している。CODでは、初版(1911)から第4版(1951)まではこの語義に「誤り」(improper)というレーベルを付けていたが、第5版(1964)以降、このレーベルは姿を消した。それと軌を同じくし、ガワーズ改訂のMEU2(1965)は、ファウラーのMEUとは異なり次のような記述をしている。(s.v. conservative)

The use of this word as an epithet, in the sense of moderate, safe, or low, with *estimates, figure, etc.*, originating in U.S., is now firmly established in Britain also—too firmly, indeed, for it promotes forgetfulness of those simpler words, which would generally serve as well or better.

20世紀半ば過ぎには、「控え目な(見積もり, 数字, 等)」の意での‘conservative’の用法がイギリスでも確立して、類義の‘moderate’, ‘safe’, ‘low’を押しよける勢いに達していたようである。

クリスタルはファウラーの見解に言及したのちに「今では標準語法である」(“The usage is now standard.”, p. 754)と述べており、21世紀初頭においてもこの意味で‘conservative’を用いることは普通であることが分かる。

### 2.1.3. meticulous

‘meticulous’はラテン語の *meticulosus* (小心な, 臆病な, おどおどした)に由来し、語源的には *metus* (恐怖, 心配)に遡る語である。OEDによると、‘meticulous’は16世紀の半ばごろに英語の文献に登場し、当時は「小心な, 臆病な, こわがりの」という語源どおりの意味で用いられていたが、この語義での最終例は1679年で、現在では廃義となっている。

その後、19世紀に入ってからフランス語の *méticuleux* を通して、「細かなことにこせこせとした」(overcareful about minute details, over-scrupulous)という意味で、この語は再び用いられるようになった。以後、否定的なニュアンスが次第に薄れ、OEDの用例から判断すると、20世紀半ばごろには「細心の, 几帳面な」(punctilious, scrupulous)という意味で用いられるようになっていた。これが今日では普通の語義であり、クリスタルが述べるよう

に意味の「良化」(amelioration) の例である。クリスタルは、‘meticulous’ という語がもつニュアンスがファウラーの時代と今日とでは異なることを次のように述べている。(p. 766)

It is a positive remark to say today that someone is meticulous. In Fowler’s day, the usage was typically negative, meaning ‘over-scrupulous, over-careful.’

‘meticulous’ の語義は over-scrupulous (細心すぎる, 念を入れすぎる) から scrupulous (細心の, 綿密な) へと変化し, 肯定的なニュアンスをもつ語となった。

COD の版を追って, 語義記述の変遷を確認しておきたい。初版 (1911) から第 4 版 (1951) までは「細心すぎる」という否定的な語義のみを記載していたが, 1964 年刊行の第 5 版では「細心の」という肯定的な語義が「通俗的用法」(popular) として追加された。

[COD5] (1964)

**meticulous** over-scrupulous about minute details; (pop.) very careful, accurate.

第 6 版 (1976) と第 7 版 (1982) でも同様の記述であったが (ただし, レーベルは「口語」(colloquial) として), 第 8 版 (1990) では「細心の」という肯定的な語義からレーベルが落ちていることからして, この語義は「口語」に限らず広く英語に浸透していたと推測できる。そして, 第 10 版 (1999) 以降は, 「細心の」という肯定的な語義のみが記載され, 「細心すぎる」という否定的な語義は姿を消した。

[COD10] (1999)

**meticulous** very careful and precise.

21 世紀となった現在では, ‘meticulous’ は一般に肯定的なニュアンスをもつ語だと考えてよいだろう。

ファウラーは MEU の ‘meticulous’ 項の冒頭で, “What is the strange charm that makes this wicked word irresistible to the British journalist?” と述べ, この語の意味用法について 1 頁半にわたって長々と批判している。ファウラーが「邪悪な語」と断ずる根拠のひとつは, 語源の意味からの隔たりである。ファウラーは次のように述べた。

It might, indeed, have had a distinct shade of meaning that would have justified its existence, if it had been applied only to the care that has its origin in terror of being caught breaking rules or mis-stating facts; but how far it is from being so limited will be plain from the quotations below.

「(間違ふことを恐れるあまり) 細かいことが気になる」という意味であれば, ラテン語の

metus (恐怖, 心配) の原義が生きているが, 実際にはそれから逸脱した用法が目立つということでファウラーは多くの実例を挙げた。20 世紀初期には新聞でやたらと用いられ, ファウラーの非難の的となったのであろう。

ともあれ, ‘meticulous’ はラテン語の metus (恐怖) を起源とし, 英語での意味は「小さな」→「細かいことにこせこせとする」→「細心の, 几帳面な」という変化を見せた。現在の語義には, 少なくとも表面上はラテン語の原義は感じられない。<sup>4)</sup>

この語はしばしば語法書で取り上げられ, また, 日常的な読書のなかでも比較的良好に見える語であるので, 3.1.1. で改めて現代の用法について例を検討することにする。

#### 2.1.4. mentality

英語で ‘mentality’ という語が使われ始めたのは 17 世紀末ごろで, 最初は「精神作用, 知能」という中立的な意味であった。その後, 19 世紀には「知性」という意味で用いられるようになり, 次いで, 19 世紀の終りごろからは「考え方, ものの見方」という新しい意味で用いられだした。この新しい語義に関して, ファウラーは MEU (s.v. mentality) のなかで以下のように非難している。

*Sir, —The mentality of the politician is a constant source of amazement to the engineer. Twenty years ago, no-one would have written that. The word would have been either mind or idiosyncrasy, according as the writer had a taste for short or for long words; in those days we had not discovered mentality...*

OED によるとこの語義の文献初出は 1895 年なので, 「20 年前ならば誰もそう書かなかったであろう」というファウラーの主張は年代が少々ずれているが, いずれにせよ MEU 執筆当時には俄かに多用されだしていたようである。今日では, クリスタルが “Today, it is the primary sense.” (p. 766) と述べるように, この語義がもつとも普通である。また, バーチフィールドが MEU3 (1996: s.v. mentality) のなかで述べるように, 用法の点でも変化があった。

*Praiseworthy application of the word largely went out of the window as the 20c. proceeded, and now mentality is almost always used in disparaging contexts. Examples: The Port managers, with their special knowledge and important position, tended to acquire the beaurocratic mentality: they said No automatically—U. Le Guin, 1974;...* (下線は筆者)

「ほとんど常に軽蔑的なコンテキストで用いられる」という箇所は注目に値する。比較的最近の辞書では, *Oxford Dictionary of English* (1998, 2003) が “the characteristic way of

thinking of a person or group” という語義に対して「しばしば軽蔑的」(often derogatory) というレーベルを付けている。なお、軽蔑的な意味合いがあることについては、既にガワーズが MEU2 (1965) のなかで指摘するところであった。3.1.2. で現代の用法について例を検討することにする。

### 2.1.5. inflammable

ここでは動詞 ‘inflamm’ (火をつける, 燃え上がらせる) の形容詞に当たる ‘inflammable’ の語義について検討する。この形容詞は, ‘in-’ という接頭辞の解釈に関連して, しばしば語法上の問題として取り上げられる。接頭辞 ‘in-’ の主な意味用法を確認しておきたい。

(Oxford Advanced Learner's Dictionary 7th ed. より引用.)

#### in- prefix

1. (also *il-*, *im-* *ir-*) (in adjectives, adverbs and nouns) not; the opposite of: *infinite*, *illogical*, *immorally*, *irrelevance*.
2. (also *im-*) (in verbs) to put into the condition mentioned: *inflamm*, *imperil*.

1 は否定, 2 は「…の状態にする」という意味の動詞を作る接頭辞である。動詞の ‘inflamm’ は後者の例であり, 「炎の状態にする」→「燃え上がらせる」という意味になる点で特段に問題はない。ところが, ‘inflammable’ という形容詞はどうであろうか。元来は ‘inflamm(e)able’ という綴りで, 動詞 ‘inflamm’ に ‘-able’ という接頭辞を付加してできた形容詞であるため, 「可燃性の」という意味で用いられるのは当然であるが, 一方, ‘in-’ という接頭辞は, 上記 1 に示すように形容詞に冠して否定の意味(「不, 非」など)を表すことも可能であるため, ‘inflammable’ の成り立ちを ‘in-’ + ‘flammable’ と考えて, 「不燃性の」という意味に解釈することもあながち不可能ではない。「可燃性」か「不燃性」かの対立であるだけに, 事は重大である。当然, 昔から語法書で取り上げられた問題かと思いきや, MEU 初版 (s.v. inflamm) には綴りについての記載はあるものの, 語義についての言及はなかった。<sup>5)</sup> クリスタルが述べるように, ファウラーの時代には特に問題としては浮上していなかったのであろう。ところが, ガワーズ改訂の MEU2 (1965: s.v. inflamm) には “It must have been a supposed ambiguity in *inflammable* that led to the coining of the word *flammable*.” という具合に, 語義を念頭においた言及が見られる。“a supposed ambiguity” とは, ‘inflammable’ が「可燃性の」と「不燃性の」の両義に解しうることを示すものである。両義性ということでは, OED (s.v. flammable) の次の引用が興味深い。

1959 *Gloss. Packaging Terms (B.S.I.)* 10 In order to avoid any possible ambiguity, it is the Institution's policy to encourage the use of the terms 'flammable' and 'non-flammable' rather than 'inflammable' and 'non-inflammable'.

これは英国規格協会 (British Standards Institution) の梱包用語解説 (Glossary of packaging terms) からの引用である。曖昧さを避けるために、「可燃性」vs「不燃性」の表示として、'inflammable' vs 'non-inflammable' よりも 'flammable' vs 'non-flammable' を推奨している。

'flammable' という語が COD でどのように扱われているかを歴代の版で確認しておきたい。COD 初版 (1911) では 'inflammable' は見出し語として収録されているが、'flammable' は 'inflammable' の定義中 ("easily set on fire; flammable; easily excited.") には現れるものの、見出し語としてはない。'flammable' が見出し語として収録されるのは第2版以降である。第2版 (1929) では「稀であり、主に 'non-flammable' という否定語のなかの要素として」という注記があり、第5版 (1964) まで同様の記述がなされている。ところが、第6版 (1976) ではその注記が消えており、'flammable' を「可燃性の」という意味で用いることが稀ではなくなったことが窺える。第8版 (1990) では、「'inflammable' は「不燃性の」意に誤解される可能性があるので、しばしば 'flammable' がその代わりに用いられる」という注記が見られる。1990年頃には「可燃性の」を表すのに 'flammable' を用いるのが普通になっていたといえよう。3.1.3. で現代の用法について例を検討することにする。

## 2.2. 語法

ここでは、形容詞 'alien' と動詞 'depend' について、前置詞との関係を検討する。

### 2.2.1. alien from / to

ファウラーが MEU 執筆当時の 20 世紀初期に変化が起こりつつあり、現在では定着した語法の例として、'alien' という形容詞が従える前置詞を見てみよう。

OED (s.v. alien *a* 4, 5.) によれば、'alien' は「…と性質を異にする、…からかけ離れた」("Of a nature or character differing *from*") という語義では 14 世紀後半より用いられた。この語義は、「…に反する、…と相容れない」("Of a nature repugnant, adverse or opposed *to*") という語義に知らず知らずのうちに移行するとして、OED は 18 世紀後半以降の例を挙げている。前者の意では前置詞 *from* を、後者の意では *to* を伴うのが基本であろうが、そもそも両者の意味の区別は微妙である。20 世紀初期での揺れの証拠として、MEU (s.v. alien) から関連箇所を引用する。

There is perhaps a slight preference for *from* where mere difference or separation is meant (*We are entangling ourselves in matters alien from our subjects*), for *to* when repugnance is suggested (*cruelty is alien to his nature*). But this distinction is usually difficult to apply, & the truth seems rather that *to* is getting the upper hand of *from* in all senses.

単に相違や分離を意味する場合は *from* を、嫌悪感や矛盾を示唆する場合は *to* を好むという若干の傾向はあるが、大抵は区別をするのは困難であり、実際のところ *to* が優勢になりつつある、というのがファウラーの観察であった。今日では、クリスタルが述べるように *to* が普通である。

COD は第 9 版 (1995) までは両義を記載して前置詞の区別を示しているが、第 10 版 (1999) では前者の「…と性質を異にする、…からかけ離れた」に相当する “different or separated” という定義は姿を消し、後者の「…に反する、…と相容れない」に相当する “unfamiliar and distasteful” という定義のみが記載されている。3.2.1. で現代の用法について例を検討することにする。

#### 2.2.2. depends (on / upon) what you mean

ファウラーは、‘depend’ が前置詞 (on, upon) を伴わずに間接疑問文を従える「ずさんな構文」が普通になりつつあるが、これは擁護できないと述べた。(MEU s.v. depend)

The slovenly construction illustrated below, in which *it depends* is followed by an indirect question without *upon*, is growing common, but is indefensible: — ‘Critics ought to be artists who have failed’. Ought they? *It all depends who is going to read the criticism, & what he expects to learn from it.*

ガワーズ改訂の MEU2 (1965: s.v. depend) では少し口調が変わり、 “The construction illustrated below, in which *it depends* is followed by an indirect question without *upon*, is common, but slovenly …” と述べている。20 世紀半ば過ぎには、このような構文はもはや普通になっていたようである。しかし、「ずさんな」というとらえ方をする点では同様であった。

一方、クリスタルによると、現在では「略式体では標準語法」(“standard informal English”, p. 755) である。また、クリスタルは、‘depends on what you mean’ と ‘depends what you mean’ を 2008 年に Google で検索したところ、ともに約 1500 万例ずつヒットしたと述べている。文体にもよるが、‘depend’ の後に間接疑問文を直に続ける構文はかなり一般化しているようである。<sup>6)</sup> 3.2.2. で現代の用法について例を検討することにする。

### 2.3. 接続法

ファウラーは MEU (s.v. SUBJUNCTIVES) で数多くの引用例を挙げ、3 頁半以上にわたり接続法の用法について独特の見解を展開している。ファウラーの観察によると、「接続法は、容易に特定できる少数の場合を除いて、消滅しかけている」(“it is moribund except in a few easily specified uses”) とある。20 世紀初期の接続法の状況を表す見解であった。

ファウラーは接続法を 4 つの型、すなわち “ALIVES” (現用型), “REVIVALS” (復活型), “SURVIVALS” (残存型), “ARRIVALS” (到来型) に分類している。

“ALIVES” とは、ファウラーが依然として自然な用法と考える範疇である。ファウラーが挙げる例を引用しておく。

#### ALIVES

*Go away.* (命令) / *Manners be hanged!* (祈願, 呪詛) / *Come what may, Be that as it may, Far be it from me* (定型表現) / *I shall be 70 come Tuesday.* (「…が来ると」) / *If he were here now* (仮定) / *I wish it were over.* (願望) / *Though all care be exercised* (譲歩節で)

最後に挙げた譲歩節中での用法に関して、ファウラーは直説法を用いる場合と接続法を用いる場合の意味の相違に言及している。直説法を用いた ‘*Though... is*’ は「…するという事実にも関わらず」(=In spite of the fact that...) の意、接続法を用いた ‘*Though... be*’ は「たとえ…だと仮定しても」(=Even on the supposition that...) の意を表す。今日では *though* で導かれる節の意味を法の違いによって区別することはもはや普通ではないが、ファウラーの時代にはまだ有効な表現形式であったことが分かる。

接続法の用法の他の 3 つの範疇についても簡単にふれておく。

#### REVIVALS

*When I ask her if she love me ...* / *Lose who may, I still can say ...*

この範疇は、詩的効果などのために意図的に古風な表現によったものである。第 1 例は Alfred Tennyson (1809-92) の詩からの引用で、間接疑問文のなかで接続法現在形 (*love*) が用いられている。第 2 例は Robert Browning (1812-89) の詩からの引用で、接続法現在形 (*lose*) に導かれた譲歩表現の例である。

ファウラーは、次に挙げる “SURVIVALS” と “ARRIVALS” については、その使用を戒めている。

## SURVIVALS

If this analysis *be* correct . . .

That will depend a good deal on whether he *be* shocked by the cynicism.

この範疇に属するのは、かつては自然であったが次第に廃れつつある用法である。ファウラーは、このような場合に接続法を用いると文章に「鈍さ」(dullness) や「堅苦しさ」(formalism) の雰囲気をまき散らすという理由で、反対している。

## ARRIVALS

If that appeal *be made & results* in the return of the Government to power, then . . . / If this *were* so, it was in self-defence. / Sir Adam asked Sir Richard Redmayne if he *were* aware that one of the miners' secretaries in Scotland had been . . .

この範疇は、接続法の用法が廃れつつあるなかで、用法への不慣れから生ずる誤謬の例である。ファウラーはいくつかのタイプに分類して、数多くの誤用例を新聞から引用しているが、ここでは3例だけ挙げておいた。

第1例では if 節のなかで 接続法現在形 (*be made*) と 直説法現在形 (*results*) が並列しており、法の区別が実質的には失われてしまっていることを示唆している。現代英語では最初の動詞も直説法 (*is made*) に合わせるべきであるというのがファウラーの見解である。

第2例では if 節のなかで 接続法過去形の *were* が用いられているが、帰結節の動詞が *was* であることにより、この文は過去の事実を述べているものであることが分かる。したがって、if 節のなかの動詞は正しくは直説法の *was* である。

第3例における if は、「…かどうか」(=*whether*) という間接疑問文を導く接続詞である。ファウラーはラテン文法の影響を示唆しつつ、英語では間接疑問文のなかで接続法を用いる必要はないと説いている。この場合は、接続法過去形の *were* ではなく、直説法の *was* でよい。

以上が接続法に関するファウラーの見解の概要である。MEU (1926) 執筆当時には接続法の衰退は相当進んでおり、流れに逆らって不自然に接続法を用いることをファウラーは戒めたのである。

ガワーズ改訂の MEU2 (1965: s.v. subjunctives) は初版とほぼ同じ内容であるが、ALIVES (現用型) のなかに新たに命令的接続法 (*mandative subjunctive*) の例を加えている点が注目される。ガワーズは、命令や願望などを表す語に導かれた *that* 節内での接続法現在形の用法 (例: *Public opinion demands that an inquiry be held.*) はイギリス英語でも確立しており、

タイムズ紙の社説にも見られると述べている。MEU の初版と第2版の約40年間に、イギリスでは命令的接続法の用法に大きな変化があったことが窺える。

クリスタルは、伝統的な文法構造を好む傾向にあるファウラーが接続法の使用に対して批判的な態度をとっていることは驚きである、と述べている。クリスタルは、接続法に関する現代の考え方はそれほど厳しいものではなく、*If this was to happen* のように直説法を用いるか、あるいは *If this were to happen* のように接続法を用いるかによって改まり度 (formality) の違いを表現することができる、と説き、次のように結んでいる。(p. 776)

Fowler makes no secret of his aim 'to discourage' what he calls survivals and arrivals; but a century on, the contrast expressed by the subjunctive continues to be used.

接続法は20世紀初期の予想に反して今日でも用いられており、表現上で果たすべき役割がある。3.3. で現代の用法について例を検討することにする。

### 3. 現代の用法

20世紀後半のイギリス英語の実態の一端を把握するために、第2節で取り上げた語義、語法、接続法について、コーパス調査の結果を示すことにする。主として、1961年の刊行物からなる LOB Corpus と1991年の刊行物からなる FLOB Corpus を使用し、必要に応じて British National Corpus (以下、BNC) も使用することにする。<sup>7)</sup>

#### 3.1. 語義

2.1. で取り上げた語のうち、ここでは 'meticulous', 'mentality', 'inflammable' の3語について語義を検討する。

##### 3.1.1. meticulous

'meticulous' は、LOB で3例、FLOB で5例見られる。いずれも「細心の」という肯定的な意味で用いられており、「細かいことにこせこせとした」という否定的な意味合いをもつと断定できる例はない。'meticulous' が類義語の 'exact' や 'painstaking' と並んで用いられる例が見られたので、下に挙げておく。(以下、コーパスからの引用例中のイタリック、ボールド、下線は、強調のため筆者が加えたもの。)

- (1) He understood the whole apparatus with an *exact* and **meticulous** comprehension that could only have come from a man who used the system - and used it with power and authority.  
[LOB B05]
- (2) Kidnap, by George Waller (out today, Hamish Hamilton 30s.), is a *painstaking*, **meticulous**

account of the most notorious and publicised crime of the 30's. [LOB C06]

また、‘*meticulous attention to detail*’ (細部にわたる周到な注意) というコロケーションは、‘*meticulous*’ の語感をよく伝えるものである。FLOB に現れる 1 例を挙げておく。(マイセン焼きの指貫の意匠に関して述べた一節より。)

- (3) Meissen thimbles can usually be readily identified by the painting style, which is always fine, and shows *meticulous attention to detail*: gilding inside the thimble is also a good indicator, but again, this is not always found. [FLOB 39]

### 3.1.2. mentality

‘*mentality*’ は、LOB で 4 例、FLOB で 12 例見られる。いずれも「心的傾向、考えかた、ものの見方」という意味で用いられており、「知性」という意味で用いられたと判断できる例はない。

‘*mentality*’ が類義語の ‘*attitude*’ や ‘*temperament*’ とともに用いられた例が見られたので挙げておく。

- (4) A comprador *mentality* is the *attitude* that the best practices are invariably connected with the global capitalist system. [FLOB J26]
- (5) Mosley's correct procedure was to develop a Youth movement inspired by anti-Bolshevist ideals, instead of basing himself on Continental models which, obviously, would not appeal to our British *mentality* or *temperament*. [LOB J56]

(4) は ‘*comprador mentality*’ (買弁的態度) を ‘*attitude*’ で言い換えて説明した例、(5) は「英国的思考方法や気質」として ‘*mentality*’ と ‘*temperament*’ が並列した例である。

また、‘*mentality*’ が軽蔑的な意味合いで用いられているか否かについても、例を見ておきたい。(4) の ‘*comprador mentality*’ (買弁的態度) という表現は、普通は軽蔑的な意味合いで用いられると考えてよいだろう。しかし、(5) の ‘*British mentality or temperament*’ は中立的な意味合いで用いられており、また、次の (6) における ‘*the language and mentality of the Florida Indians*’ (フロリダのインディアンたちの言語と心的傾向) も同様に中立的な意味合いで用いられている。

- (6) Now, for the first time, the Spaniards could count on a trustworthy interpreter familiar with the language and *mentality* of the Florida Indians. [LOB F25]

一方, 'mentality' が前に修飾語を伴い, 明らかに否定的なコンテキストで用いられている例も挙げておこう.

(7) The legacy of Italy's imperial, religious or cultural past was regarded by futurists as a dead weight preventing her from becoming a technologically advanced, militarily strong national community. Liberalism, which embodied the *'pastist' mentality* had to go. [FLOB J40]

(8) The idea that you create your own reality can also create profound feelings of guilt: someone suffering from an illness might be told that it is simply their "story" - and it is up to them to get rid of the *victim mentality* and change the punchline. [FLOB D15]

(7) の "pastist" mentality' (懐古趣味的態度) と (8) の 'victim mentality' (犠牲者的態度) は, ともに否定的なコンテキストで用いられている.

### 3.1.3. inflammable

'inflammable' と 'flammable' は, LOB と FLOB での生起例が極めて少数か皆無であるため, ここでは BNC によって状況を概観することにする.

'inflammable' は BNC で 53 例あるが, うち, 「激しやすい」という比喩的用法 (例: the most *inflammable* issue in US politics today) が 4 例を占めるため, 「可燃性の」の意味で用いられた 'inflammable' は 49 例, 一方, 'flammable' は 75 例あり, 'inflammable' より優勢である. 興味深い例として, 両者が同一文のなかで「可燃性の」の意味で用いられている例が見つかった. (*Fire Prevention in High Bay Warehouses* より.)

(9) Wherever welding (or similar flame producing equipment) has to be used within the storage area, most careful precautions must be taken to prevent the welding itself or spares etc., starting a fire. The area in the vicinity of welding and all below it should be thoroughly cleared of all *flammable rubbish*, the welding area should be screened as completely as possible, all *inflammable materials* should be removed or covered with fire protective sheets. [BNC GOK]

これは, 'inflammable' と 'flammable' の用法が揺れていることの証左である. なお, 'inflammable' が「不燃性の」を表す例は見られなかった.

「不燃性の」という否定表現については, 'non(-)flammable' が 6 例あり, 'non-inflammable' は 1 例のみであった.

以上を要するに, 現代の英語では, 「可燃性の」の意では 'flammable' のほうが

‘inflammable’ よりも優勢, 「不燃性の」の意では ‘non-flammable’ が普通とあってよい。ただし, ‘inflammable’ も依然としてかなり用いられており, また, 「激しやすい」という比喩的意味では ‘inflammable’ しか用いられないという状況もあり, 両語の用法は複雑である。当面は両語共存の不安定な状態が続き, いずれは「可燃性の」の意では flammable に収斂するのではないかと思われる。<sup>8)</sup>

## 3.2. 語法

ここでは, 2.2. で取り上げた ‘alien’ と ‘depend’ の用法について検討する。

### 3.2.1. alien from / to

alien from は LOB に 1 例見られるのみで, FLOB にはない。一方, alien to は LOB に 8 例, FLOB に 2 例見られる。やはり, 現代では ‘alien’ が従える前置詞は to が圧倒的のようである。最初に, 唯一の alien from の例を見ておこう。

- (10) The whole reason why modern science is inherently progressive, where classical natural philosophy was not, is that the scientific revolution abandoned treating theory as ‘truth’ and regarded it merely as a tentative formula for doing things - with the implication (*utterly alien from classical culture*) that it is by handling the world that we live and know. [LOB G64]

LOB から引用した (10) の例文中の ‘utterly alien from classical culture’ (古典文化とはまったく異なっ) は, その前の ‘where classical natural philosophy was not’ (古典的な自然哲学はそうではなかったが) という箇所と平行的な意味を表している。ここでの ‘alien’ は「…と性質を異にする, …からかけ離れた」という意味を表し, 前置詞 from を従えている。今日では稀な用法とあってよいだろう。

次に, alien to の例を LOB と FLOB から 1 例ずつ挙げておく。

- (11) Social service as a function of government was *quite alien to mediaeval thought* - its substitute was the mutual self-help of communities, whether those communities were monasteries, manors, townships, or wards and guilds of a city. [LOB G01]
- (12) They had certainly absorbed both Judaic and Islamic beliefs, and esoteric knowledge, through their long connection with the Middle East and had adopted much that was *alien to orthodox Christianity*. [FLOB N25]

(11) の ‘quite alien to mediaeval thought’ (中世の思想とはまったく相容れない) と (12) の ‘alien to orthodox Christianity’ (正統派のキリスト教に反する) において, ‘alien’ は「…に反

する, …と相容れない」という意味を表し, 前置詞 *to* を従えている。

### 3.2.2. depends (on / upon) what you mean

‘depend’ が間接疑問文を従える際の語法について, LOB と FLOB で調査した結果は下記のとおりである。(動詞形として, *depend / depends / depended / depending* を調査した。‘depend’ が *on* を従える場合, *upon* を従える場合, 前置詞を従えない場合の用例数を示す。)

#### 〈LOB〉

‘depend’	+ on	+ upon	φ
how	5	1	
what	2	1	1
whether	4		
which	2	1	

#### 〈FLOB〉

‘depend’	+ on	+ upon	φ
how	4	2	3
what	4		1
whether	3	1	
which	1		
who	1		

‘depend’ が *on / upon* を伴わず直に間接疑問文を従える例は, LOB で 1 例であったが, FLOB では 4 例見られる。LOB と FLOB より 1 例ずつ引用する。

(13) If it be then argued that one cannot know the system properly without knowing the whole, I should reply that it *depends what one means by both properly and by whole*. [LOB J35]

(14) “OK. So any better luck with Sharon?” “*Depends what you mean by luck*. She certainly loved her time at the studios today, even though there wasn’t anything too exciting going on. I would think it helped her a bit to get over the shock of Elvis’s murder.” [FLOB L11]

(13) の LOB の例は, *if* 節のなかで接続法現在形 (*be*) が用いられていることから分かるようにやや堅い文体であるため, ‘depend’ が間接疑問文を直に従える用法が見られるの

はいささか意外である。これは、〈depend what〉型が堅い文体にも現れうるという証拠の一つとってよかろう。一方、FLOB の例は、(14) を含めて、すべて会話部か、くだけた文体におけるものである。

より規模の大きい BNC での状況も概観しておきたい。試験的に、‘depend’ が what 節を従える場合について調査してみた。(動詞形として、depend / depends / depended / depending を調査。)

〈BNC〉

‘depend’	+ on	+ upon	φ
what	229	24	161

〈depend what〉型の 161 例のうち、話し言葉と書き言葉における用例数の比は 109 : 52 である。また、書き言葉のテキストに生起する場合も、大抵は会話部においてである。やはり、前置詞 (on / upon) を伴わない〈depend what〉型は圧倒的に話し言葉に多い。一方、学問的な文章にも例があることは逆に興味深い。次の例は学術書からの引用である。(The Idea of Higher Education. Barnett, R. Milton Keynes: Open University Press, 1990.)

(15) The notion of “critical abilities” is susceptible to a wide range of interpretations. As with most things of interest, it *depends what we mean by critical abilities*. [BNC GOR]

‘depend’ が直接に間接疑問文を従える型は、最初は話し言葉に広がって定着し、いずれは書き言葉にも広まるのではないかと思われる。<sup>9)</sup>

### 3.3. 接続法

最近、コーパス調査に基づいた接続法研究が非常に盛んである。ここでは、Leech et al. (2009) の第 3 章 “The subjunctive mood” に基づいて、命令的接続法 (mandative subjunctive) と接続法過去形の were (were-subjunctive) の最近の用法について概観する。

#### 3.3.1. 命令的接続法

命令・提案・勧告などを表す動詞・形容詞・名詞に続く that 節内で用いられる「命令的接続法」は 20 世紀以降増加傾向にあり、特にアメリカ英語では、接続法現在形を用いるのが無標で、should を用いるのは有標といえる。また、命令的接続法はイギリス英語でも近年増加傾向にあり、現代英語における文法変化を研究するうえで興味深いテーマとなっている。命令的接続法と should の例を挙げておく。

(16) The Samalians agreed to his recommendation that the workers *be given* finely woven face masks and even admitted that he might be right about the air flow. [FLOB N16]

(17) Tradition demanded that presents *should be given* as tokens of goodwill, especially to servants or to anyone performing a service to the householder. [FLOB F34]

イギリス英語における命令的接続法の増加をアメリカ英語との比較で見てみよう。

Leech et al. (2009: 281) より、英米のコーパスにおける調査結果を示す。<sup>10)</sup>

		Sbj : <i>should</i>		Sbj : <i>should</i>
〈米〉	Brown	116 : 19	Frown	105 : 10
		(85.9% : 14.1%)		(91.3% : 8.7%)
〈英〉	LOB	14 : 97	FLOB	49 : 79
		(12.6% : 87.4%)		(38.3% : 61.7%)

命令的接続法の比率は、アメリカ英語については既に Brown コーパスの時点で 85 パーセントを超える高い率に達しているので Frown コーパスとの間に大きな変化は見られないが、イギリス英語については、LOB コーパスの 10 パーセント強から FLOB コーパスの 40 パーセント弱へと 30 年間でかなりの増加を示している。

Leech et al. (2009: 57-61) は、命令的接続法の文体について考察している。従来より、特にイギリス英語では命令的接続法は格式ばった文体で用いられるとされてきたが、同書は命令的接続法が現れるテキスト・タイプ、命令的接続法の態（能動態 vs. 受動態）などの点から文体を検討している。LOB に比べて FLOB では、命令的接続法が生起するテキスト・タイプの偏りが減少して、アメリカ英語コーパスの Brown と Frown のより均等な状況に近づいている。また、態に関しては、一般にはより格式ばった文体とされる受動態での生起率が減少して、能動態での生起率が高まり、FLOB では能動態と受動態がほぼ同数に、Frown では能動態が受動態を上回るとという結果が見られた。これらのことより、命令的接続法はイギリス英語においても格式ばった含みを失いつつあるのではないかと推測している。

なお、イギリス英語では、命令的接続法と *should* に並んで、次の例のように直説法が用いられることがある。

(18) In the manufacture of yoghurt it is also important to prevent the product from wheying off at any stage, and it is essential that the ripening *is stopped* at the correct degree of acidity, and

the temperature subsequently reduced quickly and evenly. [LOB E33]

イギリス英語の話し言葉と書き言葉での状況を示すために, Leech et al. (2009: 282) に基づき International Corpus of English – Great Britain (ICE-GB) の結果を引用しておく。(Ind = Indicative 直説法.)

〈ICE-GB〉	Ind : <i>should</i> : Sbj
spoken part	12 : 19 : 5 (33.3% : 52.8% : 13.9%)
written part	9 : 11 : 10 (30% : 36.7% : 33.3%)

わずかな例ではあるが, イギリス英語では直説法も普通に用いられていることが窺える。話し言葉においては, *should* に続いて, 直接法が命令的接続法よりもかなり多いという結果は注目に値する。

### 3.3.2. 接続法過去形の *were*

反実仮定の *if* 節や *as if* / *as though* / *even if* 節のなかで接続法過去形の *were* を用いるか, 直説法過去形の *was* を用いるかについて見ておく。以下の (19) は *were*, (20) は *was* の例である。(以下, 動詞形の識別のため, 1 人称と 3 人称の単数主語の場合のみを対象とする。)

(19) Robby moved forward on to the battlements, as if he *were* escaping from his enemies, and came over to where she stood. [FLOB P16]

(20) He paused as if he *was* still not fully used to the idea. [FLOB K12]

Leech et al. (2009: 65) により, イギリス英語における近年の変化を見ておきたい。

	〈LOB〉	〈FLOB〉
	<i>were</i> : <i>was</i>	<i>were</i> : <i>was</i>
as if	33 : 15	19 : 19
as though	22 : 9	13 : 9
even if	7 : 10	2 : 6
if	64 : 38	46 : 40
TOTAL	126 : 72	80 : 74

30年間で変化が見られ、イギリス英語では接続法過去形の *were* が減少している。Leech et al. (2009: 61-67) によると、接続法過去形の *were* が直説法過去形の *was* に取って代わられる現象はアメリカ英語よりもイギリス英語のほうが進んでいる。この点ではアメリカ英語のほうが保守的である。

ところで、2.3. で確認したように、ファウラーは間接疑問文中で接続法過去形の *were* を用いるのは誤用であると非難していたが、その例は現代においてもまだ見られる。Leech et al. (2009: 64) は、「…かどうか」(=*whether*) を意味する *if* 節のなかで接続法過去形の *were* が用いられた例として、アメリカ英語の *Frown* コーパスから4例を引用している。うち2例を挙げておく。

(21) He wondered if she *were* even twenty-one yet. [*Frown* P26]

(22) ... she asked a colored man staying in the hotel if he *were* free. [*Frown* G55]

同書には *FLOB* コーパスからの例はないので、イギリス英語における例として、筆者が検索した *BNC* の結果から2例を挙げておく。

(23) Peter wondered if he *were* the only person she hadn't bothered to tell. [*BNC* CKB]

(24) And then, dismissing himself, he asked if she *were* well and happy, and she lied and said she was. [*BNC* CDY]

*BNC* では、この種の *were* の例は概してフィクションか伝記に見られるようである。誤用であるかどうかはともかく、この用法が生ずる原因は、仮定の副詞節を導く *if* と「…かどうか」を表す名詞節を導く *if* との混同、さらに、接続法過去形の *were* と直説法過去形の *was* の揺れからくる *were* の不安定さにあると考えられる。

#### 4. おわりに

以上、クリスタルが *MEU* 初版の復刻版に付した注釈を参考に、ファウラー執筆当時の20世紀初期と今日との英語の用法上の相違について検討してきた。取り上げた項目はわずかであるが、クリスタルが指摘した語法あるいは語法観の変遷に関しては、他にも興味深い項目が多々ある。例えば、‘dream’ という動詞の過去形に関して、“The past-tense choice ... is now recognized to be one of aspect, a grammatical term Fowler does not include.” (p. 756, s.v. dream) と述べ、‘dreamt’ と ‘dreamed’ の使い分けをアスペクトの点から説明している。burnt / burned, spilt / spilled, learnt / learned の区別についても同様の説明がなされている (p. 777, s.v. -T & -ED)。また、“Fused Participle” (融合分詞) の項 (p. 760) では、‘I worry about John

eating soup.’ と ‘I worry about John’s eating soup.’ の微妙な意味の違いに関する言及もあり、非常に興味深い。ファウラーの語法観察を土台にして、語法そのものの変化、語法観の変遷、言語学的説明の深まりを辿ることにより、20 世紀の英語の変化の一端を実感することができる。

21 世紀となった現在、20 世紀の英語の変化に関する研究が盛んになっている。Mair (2006) は、語彙・文法・発音の点から過去 1 世紀の標準英語の変化を論じている。Leech et al. (2009) は文法に特化して、近年の英語の変化について論じている。ともにコーパスを利用した実証的研究であり、社会言語学的な知見も交えて、様々な新しい事実を明らかにしている。

現代英語の文法変化に関する研究では、接続法の研究が特に盛んである。20 世紀における命令的接続法の発達を扱った本格的な研究としては、まず Övergaard (1995) が挙げられる。21 世紀に入ってから一層精緻な研究が続き、最近のものでは、小論で扱った Leech et al. (2009) に所収の接続法研究、また、Rohdenburg (2009) には接続法に関する次の 3 論文が収められている。“The revived subjunctive” (Göran Kjellmer), “The mandative subjunctive” (William J. Crawford), “The conditional subjunctive” (Julia schlüter) は、新しい知見に富む研究である。この分野では概して北欧やドイツ系の英語学研究者の活躍が顕著である。現代英語における接続法の用法に関しては稿を改め、研究動向と問題点などについて論じたいと考えている。

## 注

- 1) ファウラーの MEU の特徴と魅力については、浦田 (2006) で考察した。
- 2) クリスタルは、序文のなかで、ファウラーの MEU 初版の特徴を以下の 6 つの観点から整理している。“The Climate of the Time” (時代の風潮), “The Importance of Idiom” (慣用語法の重要性), “The Problem of Consistency” (一貫性の問題), “Modern Thinking” (近代的思考), “Style and Pedantry” (文体と銜学), “The Status of Fowler” (ファウラーの地位)。ファウラーの語法判断は一貫性を欠く面があり、また、文体も必ずしも平易ではないため、読み解くのに苦勞する場合が少なくない。しかし、癖があるために、かえって人々を魅了してやまないのであろう。クリスタルは序文の末尾 (p. xxiv) で、神話的存在のファウラーの真髄に迫るためには、MEU を通読し、全体的な観点から考察することの必要性を説いている。クリスタルのファウラー観がもっともよく表れた箇所であるので、少々長くなるが引用しておく。“Fowler continues to exercise a fascination on those who are interested in the English language, whether as analysts or stylists. The irony is that few people, editors aside, have read the *Dictionary*

in its entirety. A dictionary is not meant to be read in that way, of course; it is there to respond serendipitously to our needs. But if we want to arrive at a balanced assessment of Fowler's contribution to the linguistic history of ideas, we need to retrace his method and his practice as fully as we can. Reading every word of Fowler is an enthralling, if often exhausting experience, but it enables us to go beyond the popular mythology and get a better sense of the intriguing personality and linguistic genius of this remarkable lexicographer."

- 3) OED はオンライン版 (<http://www.oed.com/>) を使用。COD は H. W. Fowler と F. G. Fowler が 1919 年に初版を刊行以来、ファウラー兄弟没後も改訂を重ね、最新の第 11 版は 2004 年刊行。
- 4) Durkin (2009: 28) は、'meticulous' の語義の二段構えの変化に関して次のように述べている。 "... this is a very far from unusual process of semantic change: the word's meaning has first narrowed, and then it has developed more positive connotations or ameliorated—or in this particular instance, it would perhaps be more accurate to say that it has lost its negative connotations."
- 5) MEU 初版 には 'inflammable' の項はない。Cf. 'inflammable' の項より: "*Inflam(e)able*, formed from the English verb, & used in 16th-17th centuries, has been displaced by *inflammable* adapted from French or Latin. *Inflammable* & *inflammatory* must not be confused..."
- 6) クリスタルの話し言葉のなかにも例が見られた。クリスタルの講演 ("The Future of Englishes") を収録した DVD (*The Future of Language*, 2009) から引用する。英語の母語話者数について述べた箇所である。 "The lowest estimate I've seen in recent times... I'm talking in 2008... is something like 350 million, and the highest estimate I've seen in recent times is approaching 500 million. So, it's 400 million, more or less. What's the 'more or less'? Well, that *depends whether* you include all the pidgin and creole Englishes around the world, derived from English, but now so different from English that in many parts of the world, they are a different language."
- 7) LOB: 1961 年のイギリスの刊行物 100 万語からなる書き言葉コーパス。FLOB: 1991 年のイギリスの刊行物 100 万語からなる書き言葉コーパス。LOB と FLOB は均等な構成であり、現代イギリス英語における 30 年間の状況の変化を調べるための通時的コーパスとして使用できる。BNC: 1 億語からなるイギリス英語の書き言葉および話し言葉コーパスで、大半は 1990 年代初期のテキスト。BNC については、Mark Davies がインターネット上で公開する *BYU-BNC: British National Corpus* (<http://corpus.byu.edu/bnc/>) に拠った。
- 8) アメリカ英語の場合であるが、Mark Davies の *Time Magazine Corpus of American English* (<http://corpus.byu.edu/time/>) のチャートによると、'inflammable' は 1940 年代をピークとしてその後は減少傾向にあり、逆に、'flammable' は 1960 年代に急に浮上して、その後は着実に増加傾向を示している。
- 9) 2.2.2. で紹介したクリスタルにならって BNC で 'depends on what you mean' と 'depends what

you mean’ を検索したところ、用例数の比は 11:24 で、〈depend what〉型のほうが多かった。‘depends what you mean’ の 24 例の内訳は、話し言葉が 7 例、書き言葉が 17 例であった。書き言葉の 17 例のうち、10 例は小説の会話部より、他も大半は談話部に生起するものであった。

- 10) Leech et al. (2009) が挙げる数値のうち、Brown と LOB については、Johansson and Norheim (1988: 29) に基づくものである。なお、Brown コーパスと Frown コーパスについては次のとおり。Brown : 1961 年のアメリカの刊行物 100 万語からなる書き言葉コーパス。Frown : 1992 年のアメリカの刊行物 100 万語からなる書き言葉コーパス。Brown と Frown は均等な構成であり、現代アメリカ英語における約 30 年間の状況の変化を調べるための通時的コーパスとして使用できる。

### 参考文献

- Burchfield, Robert William. 1996, 1998. *The New Fowler's Modern English Usage*. 3rd ed. (1996); Rev. 3rd ed. (1998). Oxford: Clarendon Press.
- Crystal, David. 2009. "Introduction" and "Notes" to H. W. Fowler's *A Dictionary of Modern English Usage*. Oxford: Oxford University Press.
- Durkin, Philip. 2009. *The Oxford Guide to Etymology*. Oxford: Oxford University Press.
- Fowler, Henry Watson. 1926, 1965. *A Dictionary of Modern English Usage*. 1st ed. (1926); 2nd ed., rev. by Ernest Gowers (1965). Oxford: Clarendon Press.
- Johansson, Stig and Else Helene Norheim. 1988. "The Subjunctive in British and American English." *ICAME Journal* 12, 27-36.
- Leech, Geoffrey, Christian Mair, Marianne Hundt and Nicholas Smith. 2009. *Change in Contemporary English: A Grammatical Study*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Mair, Christian. 2006. *Twentieth-Century English: History, Variation and Standardization*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Övergaard, Gerd. 1995. *The Mandative Subjunctive in American and British English in the 20th Century*. Uppsala : Almqvist & Wiksell International.
- Rohdenburg, Günter and Julia Schlüter (eds). 2009. *One Language, Two Grammars? : Difference between British and American English*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 浦田和幸. 2006. 「Fowleresque—*Modern English Usage* をめぐって」 田島松二 (編) 『ことばの楽しみ—東西の文化を越えて』 南雲堂, pp. 200-214.

## Some Notes on Change in Twentieth-Century English Usage

Kazuyuki URATA

This article discusses how English usage has changed in the past century, with special reference to David Crystal's commentary on the original edition of Fowler's *Modern English Usage* (1926), which reevaluates it for the twenty-first century as well as showing how English has changed since the 1920s.

From among the various kinds of notes given by Crystal on approximately 300 entries, we have focused on those on word meaning, word pattern, and grammar. Words and constructions selected for examination are as follows:

- (1) change in word meaning: *unique, conservative, meticulous, mentality, inflammable*;
- (2) change in word pattern: *alien from/to, depends (on/upon) what you mean*;
- (3) change in grammar: subjunctive.

We have traced the changes in (1) to (3), firstly comparing the successive editions of Fowler's *Modern English Usage* (1926, 1965, 1996) and at times those of *The Concise Oxford Dictionary* (i.e. its eleven editions published from 1911 to 2004), and secondly utilizing LOB Corpus (composed of one million words of edited written British English published in 1961) and FLOB Corpus (composed of one million words of edited written British English published in 1991) as well as British National Corpus (composed of 100 million words of samples of varying length containing spoken and written British English).

To sum up, we have detected

- (1) a marked change in meaning and use, especially in *meticulous, mentality, and inflammable*;
- (2) the obsolescence of *alien from* as against *alien to*, and the standardization of the "*depends what you mean*"-type in informal English, i.e. the construction in which the verb *depend* is followed by an indirect question without *on* or *upon*;
- (3) an increasing use of the mandative subjunctive and a decreasing use of the *were*-subjunctive in recent British English.